

音楽教育とハイテク

Music Education and High-technology

評価とハイテク (2)

鈴木 寛 (兵庫教育大学教授)

音楽の進化

音楽の起源には様々な説があります。例えば儀式説では冠婚葬祭の儀式や神への祈りが音楽の起源であるとし、信号説では狩りの合図や戦いの合図など様々な信号に声や楽器を用いたのが起源であるとし、主な説に言語起源説、感情起源説、恋愛起源説、魔術起源説、労働起源説、リズム衝動起源説などがクルト・ザックスらによって紹介されていますがいずれも仮説に過ぎません。例えば後にハープという名前に変わった武器に弓があります。動物の角や巻き貝が進化した物がホルンです。だとすればまたまた武器起源説や死骸起源説も生まれるかも知れません。

音楽学というのがこれらを研究対象とする学問ですが、所詮心理学と同じ墓穴を掘りつつある学問ですので私とは無縁です。人間が何を考え、何をやるかが学者や学問で予想できるのなら人類はこんなにたくさん生まれてくる必要は無いでしょう。

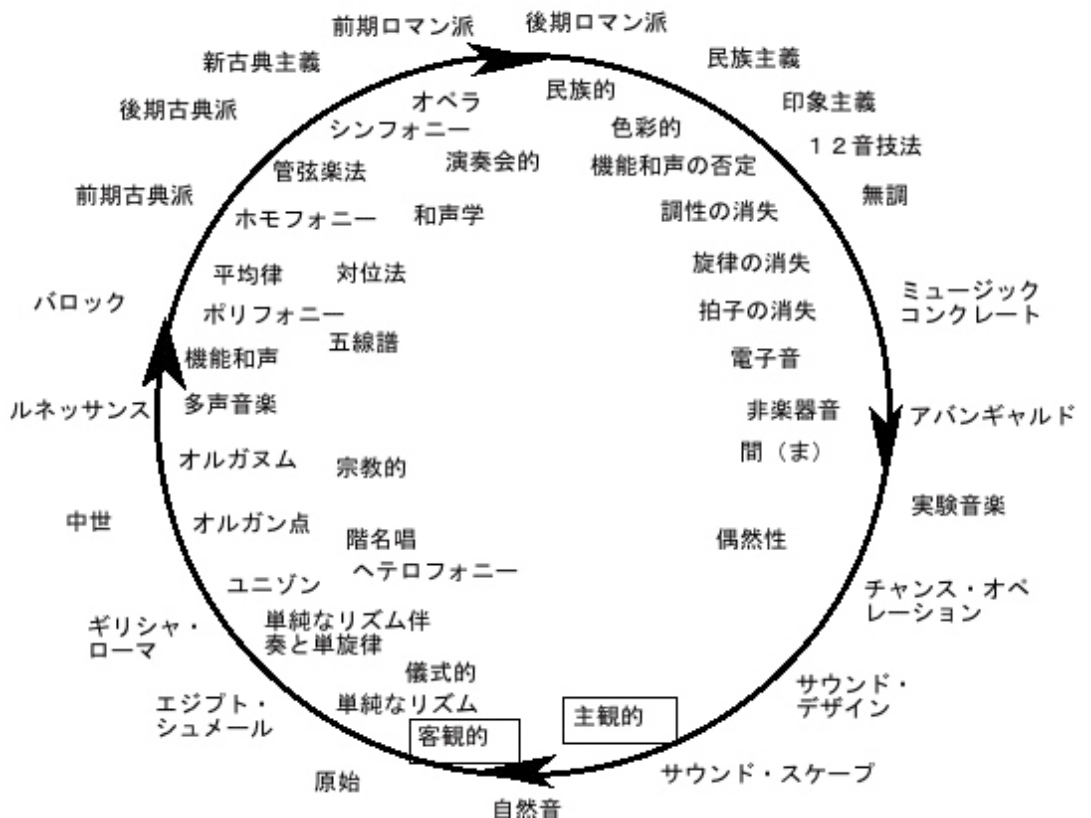
前号で述べましたように文化は多様化することはあってもそれを進化とは呼ばないというのが私の考えです。何でも新しい物が優れているという考え方を音楽に当てはめてはいけません。もしそうならモーツァルトの作品番号が新しいほど優れた作品と言うことになり、ベートーヴェンは交響曲第9番が最も優れていることになりそれより古い作品は優れていないこととなります。

右のサークル(円)は音楽の歴史的輪廻と私が名付けた(1987)ものでダーウインの系統樹のように天に向かって伸びるようなイメージの進化の概念とは異なる物です。この概念は時計方向の6時にある底の部分から右回り円を描いて元に戻る歴史の流れです。6時の位置が最も自然に近いポジションなら12時の位置が最も人工的な秩序を保った状態を示す位置で

す。

風や動物の声や人間の叫びなど自然なものが発する音が6時のスタート位置です。やがてそれを再現したり模倣したり編集したりする方向にゆるやかに回り始めます。このスピードは文明の進化の速度とほぼ同じですが、単純→複雑という方向に音楽が変化してゆきます。無文字文化の国と高度な芸術音楽を持つ国では科学技術のレベルが大きく異なりますが、これは【楽器】という道具が科学に支えられて発達進化するからです。

9時の位置辺りから今日でも再現可能な【楽譜】という伝達記録の手段が確立され、皮肉なことにその楽譜の束縛から逃れる動きが3時の位置辺りから起こり、その結果音楽は秩序から無秩序へと回帰してゆきます。その無秩序に対してサウンドスケープとかフラクタルとか名前が付いていますが、客観的には自然そのものです。京都の日本庭園にある【ししおどし】は流水を利用した鹿威しという実用から庭園の音空間の装飾を担うことになりました。【水琴窟】という水が生み出す音空間も巧妙に設計された模擬自然空



間です。

私が音楽の進化をこのようなサークルで説明できることに気がついたのは20年ほど前の事なのですが、ヨーロッパの音楽大学の先生や、アメリカの先生方にこの説を発表したところその場で何の質問も無く驚異の目で受け入れられたことを思い出します。

このサークルは実は評価の研究の産物なのです。音楽的能力については様々な学者が実音を用いたテストを発表してきました。ドレークやシーショアのものが有名ですが、いずれも音楽的能力のうち【適応】というものに焦点を当てたもので、【発達】という概念からはほど遠いものです。

この発達の概念を音楽教育の世界で確立したのは、デューイの流れを汲むアメリカのマーセルです。マーセルによれば音楽的成長（彼は発達の成長と呼ぶ）は次の5つの側面に現れると述べています。

- ①音楽的識別力
- ②音楽的洞察力
- ③音楽的自発力
- ④音楽的意識
- ⑤音楽的知識・技術

現況の小中学校はおろか殆どの音大ですら⑤の知識と技術だけを測定して音楽的能力の評価としています。

①は時代や様式や和声や旋律など広汎な音楽の要素の違いがわかるかという事であり、②は今目前の音楽的現象から隠れている音楽の全体像や他の現象との比較や評価ができるかということです。③は強制されることのないユニークでオリジナルな音楽的感性や意志を持つかということであり、④は「音」を「音楽」という情報に変換できる能力のことです。これらの能力に支えられて⑤の知識や技術があるわけで、我々も演奏家の演奏を通してその演奏の奥にある①～⑤の能力を洞察しているわけです。

私が中学校の音楽教師をしていた時、試験は常に実音を用いました。持ち込み自由（音や臭いが出る物は禁止）のテストでは例えば、カラヤンの練習風景のレコードが用いられます。演奏を中断してカラヤンが何かを大声で楽団員に言います（勿論ドイツ語で）。そして、もう一度同じ箇所の演奏がはじまります。

問題はこうです。「さて、カラヤンは何と言って楽団員に注意をしたのでしょうか？」

ドイツ語が判らない中学生はカラヤンが注意する前と後の演奏を比較して、演奏がどう変わったかということからカラヤンの注意を推察するのです。正しく①～⑤まですべての能力を総動員して答えなければなりません。何を持ち込んでも殆ど関係のないこのテストは音楽的能力を総動員しないと答えられないのでピアノを習っている生徒だけが有利になることは殆どありませんでした。

1+1は2というような答えの典型が求められるのではなく、誰がどんな能力を使ってどう答えたかが評価の対象であり、評価される側も典型的な答えを書かなくても良いので自由に伸び伸びと回答してくれた事を思い出します。卒業後30年以上にもなる彼らが未だに思い出話としてこのテストの事を私に話してくれます。

あるピアノの上手い一人の女子生徒は小学校以来音楽の評価で常に5をとっていたのに、この時ばかりは4になっ

てしまい、親子共々ひどいショックを受けたのですがこれで目が覚めてピアノを弾く事と音楽することの関係を知ったそうです。

この評価のシステムについては長くなるので今号では述べませんが、今風な言い方でポートフォリオという能力評価項目一覧表を作りその項目に当てはまるかどうかという絶対評価のハシリを1970年代まだコンピュータが手元にない頃、パンチカードを使って試行錯誤した青年教師の姿が私だったのです。

さて話を元に戻しましょう。何故評価の研究がこのサークルを誕生させたかということですが、私が気づいたのは赤ん坊が徐々に音楽的能力を身につけてゆく過程が音楽史の変化と相似であることに気がついたからです。つまり、個体発生が系統発生を繰り返しているように一人の人間の音楽的成長のプロセスは音楽の歴史的成長と非常によく似ていることに気がついたからです。

最初は触覚を通してガラガラを振って鳴らしたり、手足の運動を通して音楽的表現する時期があり、その後視覚や聴覚を通して見習いや手習いという学習期を経て、原理記号的な把握が可能になるまでのプロセスは原始時代の音楽から今日の楽譜や楽典による音楽までのプロセスと重なるのです。

このサークルで注目すべき事はたとえそれが「時代遅れ」なルネッサンスやバロックの音楽であれ依然として愛好され演奏されて居ることであり、時にはベートーベンやブラームスより優先的に選択されることもあるということです。【文化】は時代を超えて活着している一つの証拠でしょう。

ですからこどもの音楽的成長をこの視点で捉えることでたとえそれが現代や近代のレベルに達していなくても何ら音楽としては問題なく能力化しているわけで、文化として優劣とは異なる視点で評価出来るわけです。ヨーロッパの都市に於ける旧市街は殆どの場合中世以来殆どその外観を変えずに今日に至っています。それは単なる懐古趣味や保守的な思想ではなく、今もなお生き続ける文化の価値でしょう。

そうです。【文化】というのは言い換えれば【生き甲斐】のことであり、文化を継承すると言うことは生き甲斐を伝えることなのです。その生き甲斐は個人や家族でそれぞれ異なり、時には民族共有のものもあれば時代に共通のものがあります。民主主義が正義であるとする今日的な風潮はそうでなかった数千年の人類の文化の結果なのか、いつか消えゆく夢だったのかは判りませんが、少なくとも今の子ども達は民主主義だけが正義であると学校で習い、多数決が価値を決定することに何の疑問も持ちません。多くの天才は民主主義が生んだのではなく、まして商業主義的な偽民主主義が独裁者のように君臨する現代文化からは生まれないでしょう。

答えが一つしか無い課題をクローズエンドな課題と言いますが、音楽教育の課題の多くはその逆のオープンエンド又はゴールフリーという正しく我々の人生のようなものなのです。